

## 国内経済情勢

### 概観

公共投資の需要効果が一層浸透しつつあり、輸出も年初来の高水準を持続した。これを映じて3月の生産、出荷は5か月連続の増加となり、素材産業を中心とする生産抑制の持続もあって、製品在庫の調整が進捗している。この間個人消費に幾分持直し傾向がうかがわれ、機械受注も電力を中心に伸び率を高めるなどの動きもみられるが、国内民間需要回復の足どりはなお緩やかである。また雇用情勢にもなおさしたる改善はみられない。

4月の商品市況は底固いうちにも上伸基調が一服し、また卸売物価は為替円高の影響を主因に3月に続き小幅ながら下落した。他方消費者物価は教育費の引上げなどから4月中やや大幅な上昇となったが、前年比上昇率では引続き4%台にとどまっている。

3月の国際収支は輸出の高水準持続から貿易収支・経常収支とも既往最高の黒字となり、総合収支も大幅な黒字を記録した。

金融面では、企業の資金需要の落ち着き基調持続を背景に3月の全国銀行貸出金利は既往最低の水準となった。この間3月のマネーサプライは輸出代金流入等が響いて前月に比べ伸びがやや高まった。

#### 生産・出荷は5か月連続の増加

3月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速

報)、同出荷(速報)はそれぞれ+1.6%、+1.9%といずれも5か月連続の増加となった(1~3月ではそれぞれ+2.7%、+3.0%)。このため生産者製品在庫(速報)は-2.0%と前月に続きかなり減少した。

\* 以下増減率は特に断わらない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

生産動向を業種別にみると、生産調整を実施している鉄鋼、繊維、石油等基礎資材産業はいずれも生産減をみたものの、一般機械・電気機械・輸送機械等機械工業は増産となった。

出荷面では、公共投資や電力投資の効果浸透からセメント・コンクリート製品、土木建設機械、通信機械、原動機等が増加傾向をたどり、また輸出高伸を映じて乗用車、弱電製品等も増加した。このほか消費関連品目のうちでも電子レンジ、エアコン等がかなりの伸びを示した。

この間製品在庫は化学製品、紙パルプ等生産財の一部に積上りを示す品目もみうけられたが、投資財、消費財では多くの品目が減少傾向を続けた。

国内最終需要の動向をみると、3月の公共事業契約額(前年比)は+5.5%と引続き前年を上回っており、52年度末の契約進捗率は98.1%と既往最高を記録した。また53年度に入っても4月の公共事業請負額(前年比)は+52.5%の伸びを示すなど公共投資は引続き堅調に推移している。

一方、設備投資動向をみると、3月の機械受注額(船舶を除く民需)は電力を中心とする大幅受注

増が響いて +34.0%とかなりの増加となった。もっとも3月の建設工事受注額(民間産業分、速報)は -11.0%の減少を示した。

消費面では、3月の全国百貨店売上高(速報)は前年比 +7.4%と伸び率をやや高め、1~3月では +6.1%(10~12月 +5.1%)となった。品目別には衣料品の伸びが一服したものの、身回り品、家庭用品は持直し傾向をたどり、雑貨も堅調な動きを続けた。また4月の乗用車新車登録台数(速報)は前年比 +11.2%と前月に続き高い伸びを示した。

なお雇用情勢をみると、建設、窯業・土石、輸送用機械等で新規求人増をみたまものの、3月の有効求人倍率は0.55倍と依然低水準にとどまっている。常用雇用は前2ヵ月横ばいのあと -0.2%の減少となり、また完全失業者数も117万人と再び既往ピーク並みの水準となった。

#### 商品市況は底固い中にも上伸一服

4月の商品市況は、鋼板類、合繊等が減産体制継続を背景に続伸し、セメントも官公需に支えられて強保合いを続けたものの、条鋼類、天然糸等は小反落を示し、また非鉄(銅、亜鉛)、合板、ガソリン等は軟調地合いを持続するなど市況は底固い中にも上伸一服となった。

卸売物価は3月に -0.1%の微落を示したあと、4月に入っても上旬 -0.3%、中旬保合いと小幅ながら下落した。品目別には鉄鋼、繊維製品等が小幅上昇したものの、原油、鉄鉱石等が為替円高の影響から、また銅が建値引下げを映じて下落した。

4月の消費者物価(東京、速報)は、授業料、保育料等教育費の引上げに加え、季節商品も野菜・果物中心に上昇を示したため +1.3%の上昇となった。もっとも月中の上昇幅自体は前年4月(同

+1.6%)に比べ小幅にとどまったため、前年比上昇率では +4.6%と前月(同 +4.9%)に比べやや低下した。

#### マネーサプライの伸び率はやや上昇

4月の金融市場をみると、銀行券は88億円の小幅発行超(前年279億円の還収超)となり、月中平均発行高の前年比伸び率は +9.7%(前月同 +8.6%)となった。一方財政資金は地方交付金や公共事業関係費の支払いがかさんだものの、国債の発行が多額に上ったことから4,940億円の払超(前年同9,449億円)にとどまり、月中の資金余剰額は4,766億円(前年同9,466億円)となった。日本銀行は月中の資金過不足の振れを調整する趣旨から地方交付金交付日の5日に、売出手形によるオペレーションを実施した。この間コール市場では5日にコール・レートが0.125%低下し、また更月後9日にも0.125%低下した(低下後のコール無条件もの出し手レート4.0%)。

4月の全国銀行貸出(銀行勘定、速報)は月末休日による高どまりの影響もあって623億円の増加(前年4,411億円減)となった。もっとも企業の資金需要は引き続き落ち着いた基調が続いている。こうした事情を映じて3月の全国銀行貸出約定平均金利は -0.072%低下し、月末水準は6.657%と既往最低を記録した。この間3月のマネーサプライ(M<sub>2</sub>平残、前年比)は輸出代金の流入等が響いて +11.1%と前月(同 +10.7%)に比べやや伸び率を高めた。

4月の公社債市況をみると、前月来の地合いをうけて市場利回りは上旬中小幅低下を続けたが、その後は農林系統等買い手筋の模様ながめ姿勢を映じて小幅上昇に転じ、月中の低下幅は前月に比べかなり小幅なものにとどまった。一方、株式市

況は根強い物色人気に支えられ、月中を通じ高値もみ合い商状を続けた(東証指数月末 409.87、月中 +2.03)。

#### 輸出は高水準持続

3月の国際収支は輸出の高水準持続を背景に、貿易収支、経常収支は原計数、季節調整済み計数とも既往最高の黒字となった。また長・短資本収支も月前半対日債券投資が一段の増加をみたことなどからかなりの流入超となったため、総合収支では3,139百万ドルの大幅黒字となった。

3月の輸出(通関ベース)は前2か月著増のあと-1.5%となったが、1~3月では+11.1%とかなり増勢を強めた。3月の輸出動向を品目別にみると、鉄鋼、二輪自動車等が米国向け中心に前月に引続き減少したものの、重電機器、テープレコー

ダーは2か月連続の増加となり、また自動車も船積みを急ぐ動きがみられ高水準を続けた。

他方、3月の輸入(通関ベース)は一般消費財や一部食料品(魚介類)が前月に続き増加しているものの原油、非鉄金属鉱、綿花など主要原燃料は軒並み減少し、-4.7%となった(1~3月では+3.6%)。

4月のインターバンク米ドル直物相場は月初いったん220円を割込んだが、月後半にはドル高に転じ、223円90銭で越月した(月中50銭の円安)。

4月の外貨準備高は昨年5月以来11か月ぶりに減少し(月中1,682百万ドル減)、月末残高は27,526百万ドル(前月末29,208百万ドル)となった。

(昭和53年5月12日)